

# カント哲学から見た日本事情論の位置

蓮沼 啓介（神戸大学）  
hasunuma@kobe-u.ac.jp

## 1. カント哲学と日本語学

G. E. ムーアが若き日にカント哲学の批判から概念の世界の発見へと飛躍して以来、ムーアの発見に由来する分析哲学や日常言語学派の探求とカント哲学の関連は不透明なままに放置されてきた。G. E. ムーアの衣鉢を継いだオックスフォード学派の旗手であった J. L. オースティンの師であるプリチャードが展開したカントの知識論と J. L. オースティンの主唱になる発話行為論の関連も、また J. L. オースティンの早すぎる死去にも妨げられ、解き明かされには至らなかった。

こうした未解決の問題に対して新たに立ち向かう可能性が発生している。日本語学の達成が日常言語学派の復活に道を切り開いたからである。

英米語とは語法が大幅に異なるもうひとつの日常言語である日本語の分析を比較対照することにより、新たな日常言語学派が登場する。もうひとつの日常言語である日本語を分析することを哲学の手法とする対照日本語学派の登場である。対照的な日常言語学派とよんでもいい。

日本語は人称を表す語句が発達している言語であるし、また話し手の心的な態度を表す語句が良く揃った言語でもある。

話し手の心的な態度を表す語句に関する先行研究の事例としてはまず陳述論の系譜が挙げられる。また南不二男による階層構造論の研究は別の例である。なかんずく C 類と D 類の語句の研究がそれに当たる。更に近年の研究として益岡隆志によるモダリティの文法の試みや野田尚史による語順の原理と文の階層性の解析などを直ちに思い浮かべる人も多いことであろう。

コソアドの体系と人称制限について今や知る人は多い。とはいえこうした語句の振る舞いが実は人称的世界に対応していることは案外気づかれてはいない。

カント哲学は自然的な世界に対応している。人間の道徳や実践の世界はカント哲学にあっては意思の格率としてのみ現れる当為の世界に止まる。自然的な世界を認識する際に発動される認識制約としてのカテゴリーの解明は果たされている。

しかしながら人称的な世界を把握する認識制約の発見という課題が残されている。

ここで社会システム論の応用が鍵となる。ニコラス・ルーマンが展開した社会システム論の意義と限界を簡潔に確認して置こう。会社のごとき複数の人々の行動連環からなる社会システムと自動機械の如き器具のシステムを同一平面に並べてシステム一般の特質を抽出した点は輝かしい成果を上げている。とはいえドイツ語で思考や探求を行う限り、ドイツ語という日常言語には欠如した人称的な世界の探検という企てには無理が多く、こうした事態の探求は困難である。

人称的世界を表す語句を発達させた日本語の語法を対照して探求の手掛かりにすることが確実な手法である。人称的な世界は話し手と聞き手という個人のシステムの間で成立する相互交流の世界に外ならない。日本語の語法を解析すれば、こうした個人というシステムの相互作用の実相を解き明かすことができる。

## 2. カント哲学の改鑄

カント哲学は人間が知識をもち得る範囲を画定する試みである。人間が知識を持つと権利に基づいて正当に主張できる範囲を画定し、人間の領分を見定める試みである。反面では人間はもはや知識を獲得できずただ信じていることができるだけの範囲を画定する試みでもある。知識と信仰の共存を擁護する結論をカントは引き出したわけである。

カントの論証の要にはカテゴリーが置かれている。カントのいうカテゴリーとは具体的な思考の内容を抽象した際に見出される思考の形式のことである。例えば実体とその属性という思考の形式は全ての定言判断の内に見いだされるとカントは論じて行く。

思考の形式であるカテゴリーが普遍的に妥当する根拠は何に求められるのか。カント認識論の出発点には空間と時間というふたつの日常的な概念が置かれている。

空間とは何か。時間とは何か。普通の人々は空間は自分の外に広がっていて、自分もその中に小さな位置を占めているという風に考えているし、時間は自分の遙かな過去に遡り遠い未来に流れて行くという風に考えているが、カントによればこれは誤解である。空間は認識する主観に備わっているであり、外部の事物が感覚器官を刺激して心の中に生じる多種多様な感覚を主観は空間の内側に配置するのであるし、また時間も認識する主観に備わっているであり、内省により心の変化を認識する際に主観は時間の内部に時系列に沿う形に配置する。認識する主観に備わる条件とは言葉を変えて言えば、能力であり性能であるともいえる。人間であれば誰しも基本的には同一の能力ないし性能を備えているので、人間の獲得する知識は万人にとって同一となる。知識を確保する能力が人間に偏く備わっている。そうした能力のことを空間といい時間という。空間や時間は主観が感覚を獲得する際に必ず発動される能力であるから、無数の混沌とした感覚を整理し思考にまとめ上げる際にも形式が備わることとなる。この思考の純粋な形式がカテゴリーである。カントはこうしたカテゴリーは具体的な経験の内容から引き出されるのではないという意味で先験的なカテゴリーと呼んでいる。

空間と時間はカントの用語で言えば感性的な直観の純粋な形式ということになる。

それなのに人々が空間や時間は自分の外に広がり自分を越えて流れていると捉えるのはどうしてなのか。ここでカントの立場から離れて、比喩を用いて説明を加えて見よう。

カメラを使って写真を取る場合に、事物をフィルムに写し取る。事物はカメラの外部に存在するのに対してフィルムはカメラの内部にある。写し取った事物の形を捨象して考えるとフィルムという形式だけが残る。これがいわば空間であり時間である。ところが更に印画紙に写真を焼き付けて手に取って見ることが通常であるため、写真はカメラの内部ではなくてカメラの外側にあると考えるようになる。これと同様に知識を分かりやすい図形や年表に書き表して書物にすることが普通であるために空間や時間もまた人々の外部に広がり流れていると思うようになる。

同様な誤解が自分の身体についても発生する。人々は自分の体は椅子や机と同様に主観の外部に並んでいるという風に考えている。あるいは犬と猫と一緒に家の中を動き回っているという風に考えている。だが、実際には自分の体は自分の内側にある。体の輪郭を身間ないし身体空間と呼べば分かりやすくなる。体の輪郭である身間は自分の内部と自分の外部を仕切る境界面である。身間とは自分の内部と外部を識別する能力であり、言葉を変えて言えば認識する主観に備わった能力ないし性能のことである。

身間という空間と時間と並ぶ感性的な直観の第三の純粋形式を取り出すと、人称的な世界の構造がありありと明白になる。身間という能力により人は他人が自分の外部に居ることをお互いに確認しあ

うことになる。自分の領分が画定され確定する。こうした自分の領分を更に自分の周辺の外部にまで少しばかり広げることが簡単に実行される。現場指示に用いられるコ系の指示詞の指示対象はこうして身体とその周辺に広げられた自分の領分である。コ系とソ系が対照的に振る舞うのは話し手にとって話の相手は自分の外部にいるもう一人の話し手の候補であり、お互いに対等の位置に置かれていて対照的な位置に立つからである。

空間と時間と身間という普遍的な認識制約を取り出すことが出来た。

普遍的な認識制約を出発点に据えて、日本事情を解説する企てにそれでは取り掛かることとしよう。空間には日本の地理が対応し、時間には日本の歴史が対応する。そして身間つまり身体空間には日本の現代社会が対応することとなる。

### 3. 空間と地理

#### (i) 出入国の入り口と出口

成田空港と羽田空港。

関西空港。連絡線とリムジンバス。

下関港と博多港。釜山港とを結ぶ連絡船がやって来る。

博多は福岡市の東側の半分の地域を示す昔ながらの古い地名だ。

#### (ii) 都市と大学

札幌。仙台。東京。横浜。静岡。名古屋。金沢。京都。大阪。岡山。広島。福岡。

高知。土佐の高松。徳島の阿波踊り。

松山は夏目漱石の坊ちゃんの舞台だ。正岡子規の故郷だ。松山には道後温泉がある。

北海道大学。北大。東北大学。東京大学。東大。名古屋大学。名大。京都大学。京大。

大阪大学。阪大。神戸大学。神大。九州大学。九大。

北海道大学は札幌にある。

東北大学は仙台にある。

九州大学は福岡にある。

#### (iii) 山と川と島

富士山と阿蘇山。本州。九州。四国。北海道。

富士山は本州にある。阿蘇山は九州にある。

石狩川は北海道にある。

利根川と信濃川。表日本と裏日本。黒潮と親潮。

荒川放水路。江戸川と多摩川。

沖縄本島。奄美大島。屋久島。対馬。隠岐の島。淡路島。佐渡が島。伊豆の大島。

#### (iv) 鉄道網

東北本線。東海道線。山陽本線。山陰本線。新幹線。

山手線。中央線。京浜東北線。小田急線。京王線。東横線。西部新宿線。西部池袋線。

東部東上線。

環状線。JR 京都線。JR 神戸線。阪急京都線。阪急神戸線。  
阪神電車。阪神デパート（百貨店）。阪神球場。阪神タイガース。  
賀茂川と桂川。東山と嵐山。京阪電車。  
淀川と大和川。奈良盆地と大阪湾。南海電車。

#### 4. 時間と歴史

奈良時代	東大寺の大仏。僅かに奈良時代に制作された部分が残っている。 正倉院の宝物はほとんどが奈良時代に納められた宝物である。 奈良の京（ミヤコ）は平城京と呼ばれた。
平安時代	京の都（ミヤコ）は平安京と呼ばれた。 紫式部と源氏物語。荘園貴族と女君たちの物語である。 古今和歌集と三十六歌仙。雅びの原風景がここにある。
鎌倉時代	鎌倉には鶴岡八幡宮がある。八幡神は武家の神である。 平家物語。平氏という武家が政権を掌握しやがて没落するまでの物語である。諸国を放浪する琵琶法師が語り伝えた。後白河法王の采配が眼目をなす。平家と源氏を争わせて、その力を削ぐ。後白河法王は巨大な荘園領主であった。 モンゴル軍の襲来と撃退。九州一円に広がった鎌倉の武士団の力が結集された。サラセン軍を打ち破ったトゥールボアティエの戦いによく似ている。
室町時代	能と狂言の世界。寺社勢力の芸術が能である。宗教勢力の芸術であるから能には亡霊がしばしば登場する。狂言は武家の娯楽である。狂言が滑稽なのは武家領主の階級が無教養であったからである。 お伽草子の時代。浦島太郎。一寸法師。大江山の鬼退治。神仏の修行時代の物語である。絵本の源である。
戦国時代	政治の中心が動き回る分裂の時代である。細川高国と細川晴元の対立と抗争が主軸をなす。ふたりの栄華を描き上げた洛中洛外図屏風が残っている。 上杉本の洛中洛外図屏風は足利義輝が狩野源四郎に描かせて、後に織田信長が上杉謙信に贈ったものである。狩野源四郎は永徳と号した。本名は貞信である。
江戸時代	上方の漫才と江戸落語。文楽と江戸歌舞伎。和事と荒事。 火事と喧嘩は江戸の華 京の夢、大阪の夢。公家と商人（あきんど）の町が京都である。 大阪は商いの町である。見る夢も違う。
東京時代	夏目漱石の『我輩は猫である。』。猫の視点から東京人の生活ぶりを観察し批評する。文明批評という手法に立つ小説である。『坊ちゃん』。江戸っ子の気風を松山において活写する小説である。反面、明治日本の平均的な気風を松山という地方都市を舞台に描き出す試みでもある。

東京は三層からなる都市である。武蔵野。江戸。東京の三層が重なっている。武蔵野のけやき並木。江戸の下町と武家屋敷。東京の山の手。といった具合にである。武蔵はもともとは奈良時代の律令国の名前である。武蔵の国は武蔵七党と呼ばれた東国武士団の本拠地であった。要するに武蔵の国は武

家領主発祥の地である。従って武蔵坊弁慶とか宮本武蔵といった僧兵や剣豪たちに似つかわしい地名である。

江戸は徳川家康が開発した新興の都市である。湿地帯の埋め立てや掘割を進め、かろうじて天下の台所に成長した町である。火事と喧嘩は江戸の華。大勢の犠牲を出さないように素早く消し止めることが大事である。江戸では素早さが身上である。江戸の火消しの伝統を継ぐ出初め式とか、江戸前の寿司に、新興都市である江戸の新しい生活の様子が伝えられている。

東京は京都が西の京であるのに対して東の京という意味の名前である。東京行進曲。東京音頭。東京ラブストーリー。東京では新しいものが持て囃される。年がら年中、普請が続く未完成の巨大都市である。権力が過度に集中しているために、何でも過剰に企画され実行される。江戸っ子は気が早いし、東京人は気まぐれであり気移りが激しいということである。東京はマスコミに向けた都市なのである。

## 5. 身間と現代日本（日本という謎を解く）

### (i) 先端技術と伝統芸能の併存

表面的には逆説に見えるが、経験の合理性に基づく伝統の知恵の結晶である。

説明の合理性は論理の普遍性に依拠する。永遠の真実への憧れがその根本にある。

経験の合理性は人間の日常性に依拠する。生活の便利と審美がその根本にある。

伝統の技がもつ合理性である。番匠という大工職人の伝統の技。法隆寺以来の寺大工の技。

和菓子職人さんや日本料理の板前さんの腕の冴え。

原生的な素材を生かした料理法が発達している。

竹の子料理などは秦人が渡来したものである。タケはチクのなまった音である。

刺し身やお造りには醤油が欠かせない。醤油は後漢の時代に発明された調味料であり、秦人が渡来したものに間違いない。古代中国はナンプラーの文化圏であった。

経験の合理性は更に意識を越える。室町時代における禅の流行が心の動きを深める。

意識を越えた下意識や地下意識を活用する技術が伝承されている。そんな気がする。

気になる。こうした直感の下意識や地下意識の発動である。体で覚えるとか無心とか無念夢想とかはそうした技術の例である。気を使う。気掛かり。気に入る。気が入る。

元気。気力が張る。気合を入れる。

ところが活性化され全身に行き渡った状態を気という。

### (ii) 舶来品大好き。でも外人は苦手

舶来品好きの源。古代中国と辺境日本という地理的な位置。高級品はすべて中国製。

秦人の渡来による技術伝承の成立。京の都に渡来技術が定着した。

都鄙感覚の成立。優れたものは京の都で制作される。扇の要と末広がり。要に京の都が位置し日本全国に品物や芸能が広がるという仕組みである。

下がりもの。京都から下がってくる高級品のこと。川下り。品物も流れに乗って移動する。

外国人が苦手なのは語学が出来ないからである。語学が苦手の源。渡来人の受け入れと土着化。

今来たばかりの渡来人は語学力が買われる。語学が苦手な度合いに応じて日本人度が高まるという仕組みである。婿取り型の社会。女たちは町や村に定着している。移動するのは男である。その原型の成立。倭人と秦人の合成。日本人の方程式。

倭人+秦人+ $\alpha$  = 日本人。

秦人は古代中国からの亡命者の集団であり、中国語の話し手であった。秦人が習得した大和言葉が京言葉を中心とする関西方言の源である。漢字を用いて大和言葉を表記する工夫が開発される。この工夫の中から訓が発見される。漢文の訓読が発明される。和製漢文こそ外国語と日本語の中間に位置する中間言語である。この中間言語が外国語の習得を妨げている。言葉の隔てを埋めるには渡来人の受け入れが一番簡単なやり方となる。外国産の進んだ知識や技術も同時に受け入れることになるので一石二鳥の伝統となった。

英文和訳は現代の漢文訓読である。遠からず日本語と英米語を話す外国人が大量に日本列島に流入する筈である。

倭人+韓人+華人+胡人+異人                      五族共和の国が生まれる。

### (iii) 日本列島の西と東

エロチックジャパンとエキゾチックジャパン。遊女とサムライがその代表である。

ひな祭りとこいのぼり。桃の節句と端午の節句。女の子の世界と男の子の世界は違う。

ひな人形とひな壇は禁裏御所の模型図。近世の天皇は禁裏教会の法王であった。

色事は人間にとって大事な営み。共寝は神聖な儀式である。閨のお楽しみとお慎み。

おおっぴらであけっぴろげな遊女の世界がかって日本列島に広がっていた。

梅毒という病の到来が色事の世界を一変させた。おおっぴらであけっぴろげな遊女の世界から秘められた女官や花魁の世界への発展。四畳半の悦楽の源がここにある。

春画からピンク映画へ。色の道という性愛の歓喜を高める工夫が発達している。

桃の節句。桃色は生命力の色であり、太ももの色は色事の色である。

こいのぼりとふきながし。立身出世の象徴である。五月人形は豪傑の集団。

古代ギリシャの戦士や北米のインディアンすなわち土着人の戦士の流儀を思わせる。

死を恐れずに死を願う人々。勇者。討ち死にと切腹の伝統。自害は名誉な英雄の行いであるという死生観。死んでやる！。抗議の自殺が今も絶えない。

自殺を禁じ魂の再生を信じるキリスト教世界から見れば、日本列島は世界の果てに残存する外部であり異世界である。

キリスト新教の禁欲の倫理の方がよほど人類の常態から見て例外的である。但し鎖国日本は少々行き過ぎであり、その落差は大きすぎて相互に理解しあえない程である。

こうして唐人お吉の悲劇が発生する。ハリスを紳士と見込んで身を尽くすべく夜伽に参上してしまった。新教の信者にとってはこれは魔女か毒婦の所業である。

### (iv) 男尊女卑と主婦の実力

一家の財布は妻が管理する。妹の力。家刀自たち。武家の娘の財産である一期分。

機織りや海女の伝統。女の労働力は日本列島では昔から大きい。新鮮な魚介類をもてなす料亭の女将や衣装や布地を売りさばく洋品店やブティックのママさんたちに今も受け継がれている。調度品の持ち運びも女たちの仕事である。

男尊女卑は明治国家の精神である。戦国乱世に始まる新しい伝統である。大名家では男尊女卑が採用された。江戸時代には女大名は存在しない。それでも女の天皇はふたりいた。明治の皇室典範で初めて男系主義が採用された。岩倉具視の信念に基づき井上毅が作成した法案が実現した。これは新機軸であった。陸軍内部の実力者であった山県有朋すら女の天皇を容認していた位である。

マッカーサーは変り種。英米における Lady first の精神への異端児であった。

戦後国家は土建国家であり、工学部がその中心柱であった。工学部の精神こそ男尊女卑そのものである。工学部の技術や知識はもともとは築城術に淵源する。工学部の精神はもともとは戦国乱世の気風に基づく。江戸時代に入ると儒学の合理性に支えられるに至る。儒学は男尊女卑の思想である。但し儒教は男女和合をも説き男女の相補性への自覚は高い。これが江戸時代の日本列島では戦国乱世の気風に牽かれる武家の学問とされた結果、男女の別が強調され、男女の仕事が分断され男女の役割分担が固定してしまった。

西欧列強に開国を強要され、力づくで国際社会に引きずり出された鎖国日本にとっては戦国の余風は一国の独立を守るために必要不可欠な精神の遺産であった。これが明治国家の精神の源である。ところが今や日本国の独立は安泰である。こうなると男尊女卑という明治国家の精神は急速に力を失う見込みが高い。日本の本来の伝統の方が根強いからである。妹の力が蘇る日が近づいている。